

津久田の赤城神社



〔社伝によると…〕

昔、崇神天皇の皇子の豊城入彦命が東国に入ってから国が安らかに治まったので、人々が感謝して地蔵岳の中腹に社をつくって祭りました。その後、大同元年(806年)には、大沼の湖畔に社を移したので、その年号にちなんで大沼周辺を「大洞」と呼ぶようになりました。大同4年(809年)、津久田の人々は、もとの社があった場所から古い祠を津久田に移して赤城神社としてお祭りするようになりました。

建仁元年(1201年)、大きな天候異変がおきて、大雨が長くやまずにお宮が水に浸ってしまいました。津久田の人々は、神様が怒っているのではないかと考え、占いで神様の考えを聞いてみました。神様の考えは、「北の方向に数百歩いった場所に、神聖な土地がある。そこは、一番良い場所で、神様が住むべき土地である」ということでした。そこで、よく木のしげった現在地に社をつくり、鏡を納めると天候も落ち着いたので、これ以降は、鏡の森大鎮守として祭ってきました。

その後、鎌倉時代に白井城(子持地区)がつくられた時から、長尾氏によって鬼門よけ(北東の方向に神社を造って災難をさけること)として大切にされ、社もたびたび整備されたり、社領が寄進されたりしました。室町時代の寛正(1460年)のはじめには、悪い病気が大流行して多くの人が亡くなりました。この時、長尾氏は神様のお告げを得て、大己貴命(大国主命・大黒様、国造り・農業・商業・医療の神様)、少彦名命(恵比寿様、健康を守る神様)もいっしょに祭って、病魔が退散するようにお祈りすると、たちまち悪病がやんで人々に幸せがもどりました。安永2年(1773年)には豪族の狩野佐次兵衛が近郷の十か村の人びとに呼びかけて、社殿の

造営と鳥居の建立を行い、みごとな彫刻群とともに翌年の秋に完成しました。

明治になると、神仏分離のため華蔵寺法印寛徳は神職に復職して、角田因幡と改め神主として奉仕するようになりまし。また、明治元年から、皇族の一つである華頂宮家の祈願所となりました。

明治5年に社格が定められた時には、赤城神社は特別の由緒があることによって当時の敷島村第一の村社となりました。そのため、満州事変、支那事変、第二次世界大戦等に出征の軍人、徴用馬等敷島村応召は、必ず全部当社前にて祈願祭を行い出発歓送、また帰村もここで歓迎するのが例であった。

昭和32年、近所への放火による飛び火により、わら屋根平屋づくりの八幡宮の本殿と赤城神社の拝殿が焼けてしました。本殿も被害を受けましたが、翌年に拝殿を、昭和43年に赤城会館を新築しました。また、平成17年に本殿の彫刻を修理・彩色を行ったところ、彫刻の裏から「関口文次郎」の銘が現れて、江戸時代の名工の作品であることが分かりました。

なお、東西の破風に4頭のチョウが舞っていますが、これは、昔この地域でも見られたと考えられるヒメギフチョウではないかと想像してみると楽しいです。



■関口文治郎（文次郎）

1731年(享保16年)～1807年(文化4年)。彫刻師。

勢多郡上田沢沢入（現・桐生市黒保根町）に生まれる。隣村花輪村に住む石原吟八郎の門人となり、武州妻沼聖天宮の造営に当たって師匠を手伝う。1752年(宝暦2年)、妻沼聖天宮本殿の完成は弟子の立場であったが、師匠の片腕となるほどに技術を高めた。師匠から独立して在郷の彫工を育てることに務め、上田沢村に彫刻師集団を創設した。文治郎を棟梁とする彫刻の集団は郷の遠近にすばらしい作品を現代に残している。幕府より武江公儀彫刻師の名を許され、日光東照宮の修繕を命ぜられる。代表的なものとして妻沼市聖天宮の本殿・幣殿・拝殿、秩父大滝三峰十一面堂の本殿・拝殿、榛名町の岩井堂観音、伊那長谷村の熱田神宮、高崎市の山名八幡宮、宮城村の金剛寺、箕郷町の赤城若御子神社、桐生市の天満宮、黒保根村の栗生神社等があり、榛名町の榛名神社は最期の作品である。

（新世紀・ぐんま郷土史辞典）

津久田鏡森の歌舞伎舞台

地域の人々から下の杜と親しまれている赤城神社の境内にあります。

間口5間(約10m)、奥行き5間半、入母屋造の固定式農村歌舞伎舞台で、内部は平舞台・二重・三重の3部分に分けられ、平舞台左右の板壁は、開演時に倒され、舞台面を広げるガンドウ機構になっています。三重、平舞台より3尺(約1m)高くつくられ、開演時は奥壁



が外に倒され、背景をつけることによって、舞台を奥深く見せる遠見機構になっています。また、二重は、底に木製の車を取り付けられ、左右に移動できる工夫がされています。開演時には、舞台前面の左右に下座(はやし、義太夫を語る席)が、そして下座(正面左側)には花道がつけられます。

この舞台は、残されている「舞屋木数覚之帳」などから、明治2年(1869年)に建築されたものと思われま

赤城護国神社社殿

下の杜と呼ばれる赤城神社本殿の左後ろにあります。

神社の宝物庫かと思われるような間口2.1m、奥行き2.16m、高さ3.3m、瓦葺き、入母屋照破風土蔵造のこの小さな建物は、敷島小学校(現・津久田小学校)の奉安殿でした。

大正10年(1921年)当時、学務委員であった小池原の須田行作氏が、県内でもまだ珍しかった奉安殿を寄付し、校庭の東隅に建てたものです。

屋根は面積に合わせた特注の藤岡瓦、壁は中に金網を塗りこめ、表面は大磯産の黒石を用いた洗出し仕上げ、その他の資材は村内産を用い、職人はすべて村人という、珍しい近代化遺産です。残念なことは、職人の名前、建築費などがつまびらかでないことです。

昭和20年以後、学校の倉庫に用いられていましたが、津久田小学校の新校舎建設にともない、昭和49年、現在地に移され護国神社として、赤城町北地区の戦没英霊348柱を招魂合祀しています。

